

# 林政ジャーナル

No.38

2004年4月15日

日本林政ジャーナリストの会

〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13

三会堂ビル 日本林業協会内

TEL 090-5541-6891

FAX 047-444-0135

禁無断転載

## 武蔵野の平地林をめぐる課題

農政ジャーナリスト 中西博之

12月17日の研究会で、前埼玉新聞編集委員の中西博之氏から「武蔵野の平地林をめぐる課題」について講演していただいた。

埼玉県所沢市とその周辺地区で起こっている、産業廃棄物の処分とりわけ焼却に伴うダイオキシンの問題、緑の減少など環境保全の問題を中心に、地域住民の環境保全活動等に関する有意義な報告であった。

### 埼玉県は7割が平地

中西です。埼玉新聞で農業関係、環境問題、政治経済まで地方の記者ですから何でもやっています。10月以降フリーで改めて環境、林業、農業問題を考え直して書き始めようとしているところです。

今日は、埼玉県を中心に武蔵野の平地林の保全をめぐる課題について、自分の取材体験を通じて報告いたします。

日本の国土は7割が森林で3割が平野部ですが、埼玉県の場合は逆で、7割が平野部で3割が秩父地方の山です。これからお話しする平地林保全問題は、東京近郊の問題です。

有名なのは、狭山丘陵を守るトトロのふるさと

を守る会がある。70年代の前半に自然環境を守る運動が起きた。東京の東村山とか東大和などの開発が進み、狭山丘陵全体の緑が少なくなった。埼玉県でも所沢などの開発が進み、東京の肥大化の波及を受けて立ち上がった。80年代にはさいたま市、川口市にまたがる見沼保全運動がある。

江戸時代の享保年間に開発された1200町歩ぐらいの沼地を開拓した新田です。その斜面林を守ることと原風景を守ることを目的とする運動です。

今日の話の中心になる畑と雑木林をセットとした三富新田は、武蔵野の面影が残されている地域といわれるところです。狭山丘陵や見沼たんぼのような緑地保全の市民運動が起きなかった。ところが所沢のダイオキシン問題を契機に大きな問題になってきた。逆に言えば農業として踏ん張ってきて、市民運動の対象にもならなかった背景もある。狭山丘陵、見沼たんぼ、三富新田いずれも首都20~30km圏にある。

人工衛星の写真で見ると、首都圏の中では周辺には緑が少なくなっている。東京では皇居とか新宿御苑とかのレベルの緑しか人工衛星から捉えられない。本当に壊滅的にみどりがなくなっている。こういう状況の中で三富新田などの雑木林保

全の問題が起きている。

## 武蔵野二次林の歴史と背景

歴史を振り返るときに、よく引用されるのが国田独歩の「武蔵野」です。この作品について若干、話をします。

独歩が明治31年に発表した作品です。独歩自身は渋谷に住んでいまして、あの辺の雑木林のある風情を詩趣として描いている。現在とは雲泥の差です。

冒頭の出だしに『「武蔵野の面影は今僅かに入間郡に残れりと自分は文政年間に出来た地図で見たことがある。』』こういう書き出しで書いていて、いろいろ展開しています。

武蔵野は、独歩が初めて雑木林というか落葉樹林を捉えて、新たな自然の美を見つけた。文学上極めて重要な問題提起をしている。それはどういうことかということ、ロシア文学でツルゲーネフが、「あひゞき」という作品の中でカラマツ林のなかで青年たちの問題を描いた。それが明治20年代に二葉亭四迷によって日本にもたらされた。独歩はその影響を受けて、日本の平地林の落葉樹に目を向けたようです。日本の文化、文学、美術は白砂青松の世界、松とか海岸の白い砂といった世界が美として見られてきたが、落葉樹などは美として見られなかったことを書いている。

武蔵野の一節にこう書かれている。「昔の武蔵野の萱原のはてなき光景を以絶類の美を鳴らしていたように言い伝えてあるが、今の武蔵野は林である。林は実に、今の武蔵野の特色といっても宜い。則ち木は重に檜の類で…」気をつけなくていけないのは、昔の武蔵野は「萱原のはてなき光景」なんです。それが武蔵野。でも、独歩が渋谷に住んでいて小金井あたりまで含めて見た武蔵野は林であった。その林が武蔵野の特色であったといってよいと。だから、武蔵野という場合には萱原と林の風景と二つあるということです。

実は萱原から林になるのはどういう契機かという、これが新田開発です。彼はそこに目をやるわけです。

独歩が武蔵野を書くにあたって見たとされる文政年間の地図（東京近郊図）が存在している。その地図の説明文を見ると新田開発の様子がわかる。「抑（そもそも）武蔵野ハ数百里ノ平原ニシテ月光万里玉川（多摩川）ニ及ヒ富士ノ嶺ヲ照シ無双ノ勝景ナリシト云（承）応年中玉川上水武蔵野を通セシヨリ農民水利ノ便ヲ得テ年々開発シ田畑ヒラケ或ハ林木密比セリ元文ノ頃ニ至リ新田四十余村トナリテ武蔵野ノ跡ハ今僅ニ入間郡ニ残レリ」

私が非常に注目したのは、数行前に「農民水利ノ便ヲ得テ年々開発シ田畑ヒラケ或ハ林木密比セリ」の部分。つまり世界中でそうですが、開発とは森林なり草地を全部畑にするとかする捉え方です。しかしこの地図の説明文では新田開発で、田畑が拓け或いは林木が一杯になったり、一杯並んでいる。密比とはそういう意味です。そういう二次林の光景が、新田開発で生まれたということ、この文政年間の地図が記している。これは新田開発がオール開発でないことの証明、言葉を換えて言えば開発と環境保全を両立させた、新田開拓ではなかったかということがここから考えられる。

そういう地域が今崩壊している。東京でも埼玉でも同じ旧武蔵国です。今、平地林が失われて東京などでは木が数本あっても武蔵野の面影を残すといわれている。本当は農と一体となった光景が武蔵野であるということです。

余談ですが、武蔵野というのは広辞苑でひくと「広義では武蔵国の野原をいう」。武蔵国は、埼玉県と東京都と神奈川県の川崎まで含む。川崎の武蔵小杉というのは、そういう意味合いでいわれる。武蔵は広い範囲であった。

武蔵野には面白い意味があって、大きな杯とい

う意味がある。それは「飲み尽くせない」という意味あいと「野が見尽くせない」ほど広いという、この二つの意味がかけあわせてあると思う。現実問題として広い原野だったと思う。そういう原野に農業の開発として、手が入るのが新田開発であり、埼玉も府中方面も含めて東京もそうです。若干谷に入って水田があり、斜面の続く丘陵地域は開発が早い、全般的には新田開発以降そういうものが生まれてきたと言えると思う。

さんとめしんでん

### 三富新田のアグロフォレストリー

その典型的な例として、三富新田を取り上げたい。20<sup>㌔</sup>から30<sup>㌔</sup>圏で、行政区域としては所沢市、三芳町、関越自動車道の三芳パーキングエリアも三富新田地域内です。周辺に狭山とか川越とかある。ここは今でも市街化調整区域で、露地野菜地帯が発達しているところです。

ここも秣場で萱原であった。周辺の水田地帯の人が萱を刈ったり、草の肥料を採ったり、秣場として利用してきたところ。そこを元禄9（1696）年間川越藩主柳沢吉保によってに開発地域された。

ここは全体の面積が1,400町歩ある。そこに入った農家は241戸。一戸あたり5町歩分を考えている。ここが重要なポイントになる。

よく江戸時代の循環型社会・文明論が展開される中で、江戸の下肥が江戸近郊に運ばれて、そこで育てた野菜が江戸に行くという循環システムがあったと指摘されているが、はたしてどうでしょうか。元禄時代には、まだシステム化していない。享保以降そうということが次第に確立してくる。江戸から新河岸川を使って下肥専門の船「かさこい」が三富新田周辺に来たのが古文書で確認できるのは享保18（1733）年なんです。元禄年間にそういうものがない。

その土地の中で農業が自立できるという壮大な計画があったことは、この5町歩という面積から

も明らかだと思う。

現在の日本の農業の平均面積も1町歩ぐらいです。5町歩は半分が耕地、半分が雑木林という感じになる。だいたい家族は多かったと思うが、あと馬屋をセットしていたから、馬という畜力が考えられた。少なくとも2町5反前後の耕作を考えていた。関東ローム層で土が軽く、土地生産力がないということで、余分に土地を持たせたわけです。しかし1戸5町歩の開発には、びっくりさせられる。そういうことを含めて屋敷・耕地・畑という地割ができる。田畑が開け林がある風景を作っていく。自然の落葉たい肥、燃料など自然のエネルギーをそこで調達して農業を成立させていたわけです。

当時は麦とか陸稻とか豆とかソバの類でやっていた。その4、50年後にサツマイモが入ってきた。ここの土地はサツマイモによく合うのと雑木林の落ち葉があるので、完璧にここが連動してくる。

このへんでは雑木林をヤマと呼んでいる。「畑1反、山1反」と平然と言われる。畑1反耕作するのに山が1反必要だということです。

「開拓当時に居を構えた者に1戸3本ずつの楢苗を配布したりという。現今繁茂せる楢はその後身である」というようなことが、三富開拓誌に書いてある。

最初からナラの苗木を植えたところがミソだと思う。現実にその雑木林が残っている。開発に際して木を植えた、いわばアグロフォレストリーを確立したのは、三富新田だという感じがする。

この地域の専業農家率は実に高く4割近くある。市街化調整区域として奇跡的に残され、市民運動も起きることもなく、農業を続けられてきた地域です。

作物的には、上富はわりとサツマイモなどを栽培している。中富は軟弱野菜を主に栽培している。下富は軟弱野菜やウドを主に栽培している。旧

村単位によって作物の形態が変わってきている。

## 林地に開発の手が入る

しかし都市近郊ゆえ高度経済成長期ごろから林地にいろんな開発が入ってくる。林地には産廃業者、倉庫業者などが買って開発してくる経緯がある。農家の場合は、落ち葉堆肥を使わないで化学肥料に頼ったり、相続税の高騰などで林地を手放す農家が出ている。地価が高いため林地を売れば金になるという状況も生んでいる。

1980年ごろから産業廃棄物の施設が入ってくる。

産廃問題は、99年2月にテレビ朝日の報道によって大きく動くことになる。ここを中心に若干行政を振り返って見る。私がなぜ、ここに注目したかということ、新聞記者のいい癖でもあるし悪い癖でもあるんですが、1994年から96年が開発30年に当たるということで取材に入り、問題提起をしたりした。同時にダイオキシン問題もこのへんから起きてくる。開拓史資料館を造ろうとか、グリーンベルトを保存しろとか、県議会などで問題になったりとか、県、関係市町で平地林保全の動きが出たりする。

三富新田を中心にその周辺の川越、狭山、三芳、大井周辺地域で3,200畝（うち雑木林600畝）ぐらいある。その地域全体を守ろうとしている。そこを三富地域と呼んでいる。そこを守る運動が起きている。

農地・山林面積の推移を見ると、昭和36年から平成9年までの間に3割ぐらい減っていると思う。

これの対策について、どういうことが起きているかということ、「みどりの三富地域づくり懇話会」で平成13年4月に埼玉県知事に32項目の施策提言をしている。

そのなかには、施策の方向性として「三富地域が歴史的に形成してきた様々な多面的機能を持続

可能な循環型社会の啓示として生かしながら、豊かな自然環境を守りつつ、安全で生き生きとした地域を創造、形成する」としている。この中で「平地林を保全するための制度及び基金の創設」や「農産物のブランド化」など32の施策が県に提言されて、今それに基づいて行政も動いている。しかしまだ基金の創設とか相続税の減税とかに向けて徐々に動きつつある。

## 林地保全と相続税

相続税がどのぐらいかかるかという、例えば農政ジャーナリストの会や森とむらの会で視察した、Aさんのケースでは、相続税で苦しんでいて、農業を続けるのであれば何とか農地並みの納税猶予をしてほしいという訴えがあった。このお宅の場合は、屋敷が0.25町歩、畑が3町歩、雑木林が3.3町歩、ここで相続が発生した。92年にバブルの時で相続税の額は約8億円。農地の場合は、農業投資減額できるので納税猶予がきくけれど、雑木林はその対象にならない。そこで結局農地の納税猶予はされたものの5.5億円の相続税を納めた。といっても現金を持っているわけではなく、従来から落ち葉を利用している雑木林の3分の1を売り窮地をしのいだ。市民感情はどうかというと、従来は市民には、農家は都市近郊の地価が高いところで資産を持っているのだから当たり前だという意見もあったが、今ではそういう意識よりも何とかして農業継続なり、緑を残してほしいという声が非常に大きくなっている。まだ運動の輪にはなっていないけれど、そういう状況です。

相続は一斉に起こるのではなく点として起こる。人間の死は、ある時にばらばらに起きる。しかし30年、40年のうちに1代に1回は起こりうるから、数10年では崩壊しまうようなことになるだろう。

さきほど三富新田のことを言いましたけれど、

屋敷、畑、山林という地割を受け継いでいる。屋敷も広い。昔の農業は庭で農作業をしたり屋敷をずいぶん広くとったので、それが宅地に評価されて上がってきってしまうというようなことで、大変な問題になっている。

J Aいるま野が請願した時の資料では、「平地山林、屋敷林は落ち葉を堆肥として畑に還元するとともにかけがえのない緑地となっている。国土環境保全、大気浄化、保健休養、教育文化などの多面的な機能を持っている」と訴えている。

● 農家個々の対応策だけで任せていいのかどうか、ということになるかと思う。

これは森林施業計画が出る前の話ですが、保安林に指定すれば相続税、贈与税は財産評価が3～8割の控除がある。

このことから外から、保安林の指定をうけたらどうかといった指摘があった。現実問題として、売り払って1億でも2億でもなれば、農家はそういうことをしないと思う。そうではなく、緑地という公益性があるのであれば、農業を継続する形の中で何か違った手をうつことを考えないと、都市近郊では保安林指定は無理だという感じがする。農家のエゴとして考えていいのかどうかと考えてみた。

● 農水省の考えている都市農業の概念は非常に狭い。というのは、都市農業は例えば東京の世田谷の中にあるちまちました農業のようなことを考えられている。それも大事ではあるが、都市近郊にグリーンベルト的に残っている農業をどうするかということを考えるのが、都市農業の問題ではないのかなと思う。

## かつてのグリーンベルト 構想対象地

三富新田にはドイツなど海外から視察に来ている。研究者の中では「ここは世界的遺産になり得るのではないかと指摘されてもいる。土地利用

が非常に計画的であること。封建社会の中で平等に経済的な恩恵を分けている。農村景観としてもすばらしいといった指摘があった。

もう少し全体的に見るべきだとの視点ですが、首都20<sup>㍍</sup>、30<sup>㍍</sup>圏を対象にかつて首都圏整備法の計画で、グリーンベルトを作る構想があった。これはイギリスで100年前に打ち出されたハウードのグリーンベルト構想を下敷きになっているが、そういう動きがあった。

結局、都市化のエネルギー、農業サイドの反対などで立ち消えてしまった。私はこういう理念をもう1回考え直したらいいと思う。このグリーンベルト構想は崩壊しているけれど、狭山丘陵、見沼田んぼ、三富新田というこの20、30<sup>㍍</sup>圏の大規模緑地は、実は農業として残った。それが奇跡ではないかと思っている。

グリーンベルトの思想も後退した中で、残していただいたものを積極的に評価すべきであると、新聞でも指摘してきた。

## 森林施業計画を活用

平成14年度の森林法の改正により、森林施業計画で新たな動きが出てきた。森林と人の共生林という位置づけで、森林施業計画の認定を受けた平地林は、相続税評価額を最大4割軽減させる措置がとられることになった。これは1団地30<sup>㍍</sup>以上の要件がある。最初この対象になれるかどうか気をもんでいた。説明会を聞いていると、規制の網かけだとか、どこにも売れないなどと農家も反発していた。ところが蓋を開けてみたら、狭山市で122<sup>㍍</sup>実現した。これは今年（03年）5月から五カ年計画で、計画者であるJ Aいるま野と森林所有者が協同して、計画的に適正に保全管理する事業です。

埼玉県、市町も、三富新田を中心にして所沢、三芳、大井、川越でも促進していて、かなり増える可能性がある。たぶん200<sup>㍍</sup>以上はいくのでは

ないないかと思われる。

岩槻市でもこういう問題に取り組もうとする動きがある。しかし評価額4割軽減といっても何億円という世界ですから大変なことです。

## 国の自然再生と都市再生の動き

国の動きを若干見ておきたい。自然再生事業というのを、環境省が昨年度ですか、三富新田の中の「くぬぎ山」地域を自然再生の対象に指定して、動き出している。ここは、ダイオキシン問題が起きたところで、産業廃棄物焼却施設が集中して、かつてダイオキシン規制がなかった頃は10数社あった。そこはテレビ朝日が報道して以降、法の整備が行われたり、国、県の行政努力があったり、市民運動が盛んになったりして、今は焼却はゼロになった。しかし産廃を圧縮や粉碎など中間処理の問題が残されている。

くぬぎ山地域が、150%ある。行政区域が5市町に跨っている。ここの地域の自然再生の方向は、環境省が中心になってやっている。産廃施設を移転誘導して、そこに雑木林を再生していこうということです。

このくぬぎ山の計画は、法律が施行する前に立ち上がっていたもので、おおまかな目標は出来たが、法律に基づく協議会は立ち上がっていない。来年度に立ち上がる方向になっている。

自然再生法で注目したいのは、これを作ったものとなる「新生物多様性国家戦略」というのがある。その中で自然破壊について三つの危機が提起されている。第一番目の自然破壊の危機は、人間活動とか開発によって生態系が破壊されるとか、開発されていくという従来のパターン。第二の危機が、従来人間がかかわって作ってきた雑木林など二次林が、人間活動が縮小することによって、あるいは生活が変化することによって変わっていく、そして自然生態系が破壊されていく、これが第二の危機。第三の危機は、海外から入ってくる

いろいろな動植物も一つの危機と捉えられている。

二次林が燃料革命とか肥料革命によって使われなくなり、放置されている。それはオオタカなど様々な生物がいなくなってしまうような状況もあるが、そういうところにも目がいったということが注目すべき点です。それを受けた自然再生法の対象になったことは意義がある。これは今後追いかけていきたいと思う。

もう一つ、最近でかい動きがある。これは政府のプロジェクトの一環で、首都圏全体の自然環境を総点検するという事です。三富新田とか千葉の北総台地とか三浦半島とかの全体的な首都圏の緑地保全をどうするかという動きがある。その対象地域として三富新田が選ばれ、ワーキンググループの作業が終わり03年度中に協議会で正式決定される。首都圏に水と緑と生き物の環づくりを目指して、首都圏の自然環境の基本目標を定めることになっている。生物多様性保全、人と自然のふれあいの場、良好な景観、防災機能に分類、14の見本目標を設定していくことにしている。絵に描いたモチに終わらなければよいが。

もう一つ大きな動きとしては、文化庁が6月に農林水産業にかかわる文化的景観の保全に乗り出し、全国で重要地域180を選んだ。代表的なところは、三富新田とか千葉の鴨川の大山千枚田とか柳川とかを文化庁が、各県に条例を作らせたりして保全していく方向です。

三富新田はこういう形で紹介され、複合景観としてなんとか出来ないかということで、モデル中のモデルになってきた。

## 里は50戸単位で形成

里山について私の考え方を述べたい。里山の定義はどこから来ているのかと探してみると、江戸時代の木曾山雑話という文章の中に「村里の人家の近くにある山を里山という」という指摘がある

ようです。

私は、里と山を離して考える必要があると思う。江戸時代の古文書を読んでいたら、里のことが書いてあった。「国の中（うち）に郡あり。郡の中に庄あり。或は郷又何領と唱える。庄郷領の中に里あり。一家を一戸とし、五十戸は一里（ひとさと）とする」とあった。注目すべきは、一つの里を五十戸というところだ。里というイメージは、そこに人家があって、集落があって、五十戸ということだ。最近、里地・里山と使っているケースを見ますが、里の中に里地も里山もあると言うことだと思う。これは里の字を考えると明らかにそうです。里というのは中国からきた漢字ですけども、里の上は田んぼの田その下に土をつけている。一つの農村集落という見方をしている。そこにはくらしがあり、田もあり、山もあり、人が住んでいる。それが里です。日本人は里のイメージはずっと持ち続けてきている。歴史的には里は大宝律令まで遡れると思う。701年に大宝律令が施行されて、このときに日本の国全体を60余国に定めた。そのなかに国、郡、里という定め方をしている。やがて里は郷に代わったりする。それを連綿として受けている。里も当時の50戸を目安にしている。江戸時代の人々も改めて「里」について勉強していたが、そのイメージは日本人の意識の中に生きています。だから里山ブーム見たいなものが起こる。環境省での里地、里山なんかの定義を見ていると、環境基本計画では国土空間の特性に応じて山地、里地、平地、沿海地域といった捉え方をしている。この論法でいくと都市近郊の里山は当たらない。私は都市近郊こそ里山を残すべきだと思う。秩父の山とかアルプスなど様々な山も大事ですけど、都市近郊ではかつて「野が見尽くせない」ほどあった空間がなくなっている。東京ではビル屋上の緑化が大ニュースになることなどはばかっている。こんなレベルの問題ではなく

て、もっと大規模緑地づくりをきちっとやるべきです。東京の緑地行政は都内だけで考えている。もっと広域的に考えてほしいということと、都市近郊には農的空間もあるので、そういうものを含めて考えていくことが重要だと思う。昔の入会地ではないが、市民が自由に緑にふれられる「都市入会地」のようなものを作る必要があるのかなという感じもしている。

これ以上巨大都市を拡大してはいけないと思うし、抜本的に都市近郊の緑地確保を考えてほしい。

私は、横浜の寺家ですか、あそこでも2、30町歩の里山がある。あそこの方を三富新田に案内したときに生産地があること、雑木林があることの存在価値がすごいといわれたことがある。里山は農とのからみの中で見直したい。しかし、都市近郊の地価高の中で農業が衰退していく、新たな担い手を作っていく必要がある。それをどうしたらいいかと、農家だけでもいけないし、国、県、市町村の行政が本当にしっかり農的空間の重要性を位置付けて総合的にやっていかなければならない。同時に市民運動、NPO運動も重要であることかなと思います。

## 質疑応答

ー 当時のJA所沢は、ダイオキシンの調査をしていながら、データの公開要求があったにもかかわらず公表しなかった。それはそれとして、平地林の保全に関する農協は、どのような考え方をしているのかお聞きしたい。

中西 組合員の中には、このままでは野菜も売れなくなる。こんなことでもいいのかという若手農家グループもいて立ち上がった。そういう農家のニーズなり市民の不安を農協が真剣に受け止めてこなかったと言えると思う。国、県のダイオキシン対策が遅れたことが大きいんじゃないでしょうか。

J A所沢が合併したJ Aいるま野は森林施業計画の計画作成者となって、森林所有者と雑木林保全に取り組んでいる。

一 武蔵野は昔から草原で森林はなかったのか。

中西 古い文献、文芸作品などによると広大な萱の原だったようです。

一 質問というより意見です。昭和36年と平成9年の比較で見ると狭山丘陵地域の山林は半分には減っていない。横浜は10分の1に減っている。減ってから残っている山林を横浜市が借りて公園として管理している。それによって森林の多様性が期待出来る。(文責・事務局)

## 里山の保全はなぜ必要か

東京学芸大学教授 小泉武栄

2月19日に開催した定期総会で、小泉武栄東京学芸大学教授から、標題の講演をしていただいた。小泉教授は、外国からの帰化植物の繁殖などによって、日本古来の「在来種」が減少するなど、植物の生態系に大きな影響が出ていることを憂慮するとともに、在来種を保存するために里山は重要な役割を果たしている、生物多様性の宝庫であり、水源の林としても貴重な存在であることを強調した。

### 里山は生物多様性の宝庫

結論から言うと、まず生物の多様性、特に日本の在来種を保存していく上で里山はとても大事だ。今日はこのことを中心にお話します。

二番目は生態学的サービス、と言ってもわからないと思います。簡単に言うと、きれいな空気・水・土壌、そういう私たちが生きていく上で必要なものを自然が提供してくれている。水は雨が降ってくるから、なくならないと思うかもしれないが、そうではなくて自然があって、里山があるからきれいな水を私たちが飲めることになる。逆に里山を開発して、ゴルフ場などにしてしまうと、その生態学的サービスは明らかに失われてしまう。例えば、村の水源地がゴルフ場になってしまうと、そこでよい水は飲めなくなってしまう。

三番目は、優れた自然人文景観をもっている

ということ。日本人のふるさとみたいな里山をぜひ維持して行きたい。これは私たちが持っている、希望だと思う。大きくみていけば、この三つぐらいの観点から里山の必要性を述べる事が出来ると思う。

### 里山の非常に代表的な景色

田んぼがあって、裏手に雑木林が広がっている。上の方は東京・町田市の山中というところの里山。下のは五日市の横沢入という里山。

ここは一時J Rがこの里山を削って谷を埋め、宅地にしようかと計画した。買うのに69億円かかった。ところが、すばらしい自然が残っているので、各方面からそれは困るという話があって、結局J Rは開発を断念して、現在そのままになっている。

J Rは東京都に買ってくれと言っているが、69億円ではとても買えるはずがない。バブルの一番の時期に買ったので、もうそんな価値はなくなっている。東京都は10億円でも高いと言っている。買わないので、そのままになっている。

やっと、市民が田んぼを作るとか、とんぼ池を作るとかいった形で活用しようとする動きが出始めている。こういったのが、典型的な里山の景色だ。

よく言われてきたことは、里山は非常に捉えに



くいということ。緩やかに起伏していて、地形にも植生にも特徴がない。更に、「人が手を入れて作ってきた半人工自然でそんなに価値がないのではないか、どこにでもあって、月並みなものだから壊してもいいではないか」と言われてきた。

里山を守れという人たちは、そのように言われると反論できなくて非常に困ってきたが、実は、価値がないじゃなくて、予想以上に多様性に富んでいる。雑木林に覆われた丘陵地にはご覧の通り谷津田の水田、湧水と小川と湿地、これらがセットになってある。なぜこのセットが出来てきているのだろうか。

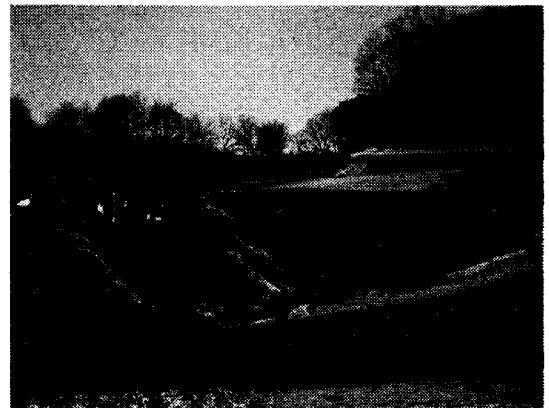
## 里山は水源の林

雑木林はなぜあるのかというと、簡単に言うと田んぼのためだ。谷津田に水田があるけれど、日本は夏に雨があまり降らないので、どうしても水が涸れてしまう。大きな川があれば、そこから取水して水田に灌漑出来るけれど、小さい谷津田だから、大きな川が近くにない。そこで自前の水源をそこに求めざるを得ない。だから丘陵地の里山は、簡単に言うと水源の林ということになる。

少し上がってくれば、たちまち稜線になってしまうというごくごく浅い山だ。面積的には非常に狭いけれど、この林を伐採してしまうと、水不足になってしまう。そういう意味で、これが一番大事な役割だ。逆にいえば、非常に面積が狭くても、そこそこの水はいつも供給できるから、意外に米がたくさん獲れる田んぼができています。

歴史の話になるけれど、小田原に北条早雲が始めた後北条氏というのがあった。鎌倉幕府とは別の北条氏なので、後北条氏といっている。あの北条氏が、最終的には秀吉に攻められて降伏するけれど、石高百万石といわれた。一体どこからそれほど米が獲れたのかわからないでいた。なぜかという、当時利根川の流域、関東平野の真ん中あたりでは、利根川や荒川のような大きな川が氾

濫するので、開発が進んでいなかった。大きな川の流域で開発が進むのは、江戸時代になってからと思ってい。いま私たちは、新潟平野だとか仙台の平野、関東平野に田んぼが広がっているのを見ることが出来るが、あのような状況になるのは江戸時代特に中期以降で、ずいぶん新しい。当時、北条早雲の子孫は五代しか続かなかったが、彼らが米をどこで生産していたのだろうか？大きな平野の流域ではない。それではどこかといったら多摩丘陵とか神奈川県内の丘陵地、あるいは台地を刻んでいる谷津田だったらいい。例えば神奈川県の大和市あたり。あの辺は台地を刻んで谷津田が発達しているが、ああいって小さい谷津田とその背後にある里山。それが米の大きな生産地になっていたらしい。みんな小さいけれど、全部合計すると百万石ぐらいになる。思わぬ生産力を持っていることになる。



谷津田の奥の湧水のある窪地・町田市山中

そういうことで、一番大事な役割は水源林です。他に薪や木炭などを供給する役割もあった。それから柴刈り雑木の葉や細い枝を採ってきて、田んぼに入れたり畑に入れたりして肥料にした。出来れば腐らせて使った方がいいが、そうしなくても一冬越せば肥料になった。木は15年から20年おきに伐採する。すると萌芽更新の形で芽が出てくる。それを育てればまた雑木林になる。こうし

て継続して反復利用することができる。

## 生活に密着していた雑木林

雑木林の利用の状況を図にしたもの。これは子供向けの本からとった。ときどき図にあるように、伐採して燃料にする。それから下草刈りをして肥料にする。さらに落ち葉を集めて肥料にするとか、いろいろな形で利用が進んでいる。薪や炭を作る、竈に入れて燃やすとか、囲炉裏で燃やした灰を畑に入れる。シタケのほだ木なども出てくる。また落ち葉を使って堆肥を作ったり、家畜を飼ったり、諸々のことに利用される。絵に描くと意外に複雑な利用の形態だったことがわかる。里山は日常生活に欠くことが出来ない存在だった。

話だけだと、わかりづらいことがあるけれど、絵にするとなるほどこのようになっていたのかと理解できるのではないかと思う。

## 約半分が宅地に転用

東京で里山がどのようにして減ってきたのか調べてみようというのが次の話だ。

これは私のところで、書いてもらった卒業論文の一つのデータ。多摩丘陵、加住丘陵、狭山丘陵、草花丘陵、四つの丘陵地をとりあげて、その中の谷津田がどれだけ減ってきたかということ地図から拾った。1921年から23年頃と29年から35年頃とか、多少ばらつきはあるけれども、だいたいこのくらいの頃に出た地図をチェックした。25000分の1の地図7図を用い7つの時期に分けて調べた。全部で49枚の図をチェックし、そこある谷津田の数を出した。例えば多摩丘陵だと、1921年頃558、それから550になって、戦後に645に増えた。これは食糧不足になって増えたのだが、それから559になってその後1974年から81年頃にかけて、162にまでいき一気に落ちてしまった。かつてのほぼ4分の1ぐらいに減少した。その後

1988年頃の状況で101まで落ちる。最近では、若干減っているけれども、もう大きくは減らないで、現状に至っている。

加住丘陵や狭山丘陵は、一桁数が小さい。たとえば加住丘陵では57ぐらいあったものが急激に落ちてしまって、現在6つぐらいしか残っていない。狭山丘陵の場合も、同じように49だったのが現在10ぐらい。草花丘陵は、青梅と秋川の間丘陵地だけが、ここでも8とか6とか、かつての10分の1ぐらいまで落ち込んでしまっている。

これは何に変わったのか調べてみた。谷津田がつぶされて、住宅地などいろいろな用途に転用されている。それぞれの比率をみると、多摩丘陵は宅地が45.7%ある。これは想像できると思うが、多摩ニュータウンという大きなニュータウンを作ったためだ。最近では、例えば八王子の南野ニュータウンのような大きな団地が出来たりして、ほぼ半分近くが宅地になった。

次に多いのがゴルフ場。多摩丘陵ではそんなに多くないけれど、例えば草花丘陵は21%、加住丘陵でも17.2%がゴルフ場になっている。

意外に多いのが学校。学校というのは、例えば都立大学も、世田谷にあったのが八王子市に移転している。八王子にいくといっても市街地に移転するわけではない。ほとんどが丘陵地を拓り開いて移転している。中央大学のそうだし、拓殖大学も国士舘大学も、全部ではないが移転している。今八王子市には全部で26大学があるそうで、それが7.3%という数になった。現在はもう少し多くなっているような気がする。

そんな風に、谷津田をつぶして周りの丘陵から土砂を落として平らにし、てそこにいろいろなものを作るといことで、谷津田がどんどん減ってきたことがわかる。

転用の中には鉄道用地も結構多い。鉄道の線路が次々に敷かれていくけれど、それだけの場所をとっておる。あと多いのは墓地。いろいろなどこ

ろに墓地が出来てくる。郊外の墓地は、かなり大規模なもので相当広い面積を占めている。

谷津田の場合は、農業が出来なくなって放置されて荒地に変わってしまうというケースもある。それが結構大きな面積を占めている。そのほか倉庫とか資材置き場など、いろいろな形で使われているが、それらの割合もかなり大きな面積を占める。

### 里山の水路は生物の生命線

これは町田市の谷津田。谷津田をつめていくと農家があって、その裏に杉林がある。かなり奥のほうへいくと、地形的に明らかに浸食されて、窪地になっている。この窪地の中に湧き水があって、そこから水路が流れている。田んぼの奥には湧き水があって、その水を利用して水田に灌漑してきた。

背後の丘陵は非常に浅い。もう少し先へいくと稜線になって、そこを超えれば別の流域に入ってしまう。



土の土手の残る小川・町田市山中

わずかばかりの雑木林が、田んぼを灌漑する役割を担っている。泉から湧き出した水が、水路をつたってが流れてくる。この水路はどうってことがないように見えるけれども、実は意外に大事な働きをしている。水が流れていて、両脇がコンクリートでなく土手であることがすごく大事なことだ。土手がなぜ大事かというと、ここにはカエルがいたり、メダカがいたり、場合によってはサンショウオがいたり、イモリがいたり、いろいろなものがある。フナなどもいることもある。ドジョウその他諸々のものがここで生活している。元はカメなどもいた。今では、日本の野生のカメはほとんどみられない。以前は里山の水路にカメがいた。それが日本の本来の姿だ。そこにカエルやいろいろな生きものを食べる蛇や鳥の仲間がやってくるから、きれいな食物連鎖が成り立っている。蛇がいたり小さな鳥がいたりすれば、当然それを狙ってオオタカみたいなものがやってきたりする。そういうことで食物連鎖がさらに上まで行くということになる。こういう場所がとても大事だというのは、コンクリートU字溝で固めてしまうと、農家は便利だが、蛇はそこに落ち込むと上がれないので餓死してしまうし、カメも同じで1回落ちたらあがれなくなってしまふ。カエルにしても同じで、U字溝は結構深いから飛び上がってもあがれない。というような形でいろいろな動物が棲めなくなってしまふ。魚も同じで、ドジョウみたいに、水の底を這っているものは何とかなるけれど、泳いでいるのは雨が降ると流されてどこかに行ってしまう。里山の水路はなんの変哲もない景色だが、実はこういう水路を維持していくことが、その生物全体を維持していく上でとても大事だということになる。

もう一度改めて里山の生態系をみると、例えばそこに水田がある。そこに雑草が生えてくる。オモダカとかカヤツリグサ、ウキクサだとか。今、子供は田んぼに接する機会がなかなかないけれど

も、皆さんぐらいの世代で田舎で育った方は、こういうものをみていると思う。私も田舎で育ったので、みんな記憶にある。たとえば田んぼに行くと、ゲンゴロウがいたりタガメがいたり、トンボのヤゴがいたり、ホタルがいたり、それからタニシがいたり、ドジョウがいたり、あるいはケラみたいなのだったり、水田には本当にいろんなものが棲んでいた。メダカなんかもある。消毒するともちろんだめになってしまうけれど、消毒しなければ、水田は生き物の宝庫になりうる。

水路と湿地は、しばしばセットになっていることが多い。湿地にはミゾソバだとかサンカクイだとか、いろんな湿性の植物が生えてくる。

五日市の横沢入に行くと、こういった植物が非常にたくさん生えている。そこにイノシシが出てきて、湿地で寝転がって身体に泥をつけて、ダニかなんかを取る場所がある。これをイノシシのぬた場という。そのあたりにミゾソバなどがたくさん生えている。

水路には、さっき言ったカエル、オタマジャクシ、サンショウウオ、イモリといった両生類がいる。メダカやフナ、場合によってはウナギなどもくることがある。ウナギは太平洋の深海まで行って、卵を産んでほるばる谷津田のところまで戻ってくる。どうやって戻ってくるのかよくわからないところがあるが、とにかく戻ってきて実際にいる。ダムがあると普通越えづらいけれど、ウナギは這ってくるようで山の方まで来てしまう。カエルや小魚を蛇や鳥が食べ、さらに蛇や鳥の小さいものは、猛禽類やイタチやタヌキなどが食べる。かつて川にはカワウソが魚などを食べていた。このように、予想以上にいろいろな生きものがいた。

## 里山は猿や鹿の棲み家だった

里山にはかつて、サルとかイノシシ、シカなどが棲んでいた。何年か前に都心にサルが出てき

て、1ヶ月ぐらい遊び、それから捕まったことがあった。あのときにマスコミの論調は、「サルは山に帰るのが一番いいんだ」というものだったと思う。あのサルは、都心に出てきて何か不自由していたわけではない。誰かが餌をやったりして、勝手に遊んでいたのでそのままよかったと思う。けれども、捕まえてどこか山に戻した。東京の都心にサルが出てきたりすると、みんな大変だと言うけれど、本来はそこにいたのだ。江戸時代までは、里山も武蔵野台地も多くの動物たちの棲家だった。

千葉県に賀曽利貝塚という有名な貝塚がある。あそこの貝塚で縄文人が、何を食べていたかを調べた例がある。シカやイノシシの骨がたくさん出る。今、千葉県の海寄りの賀曽利貝塚のあたりに、シカやイノシシはいないけれども、当時はたくさんいたということがわかる。武蔵野台地なども、当然シカやイノシシがたくさんいたわけで、そういうものは里山の生態系の更に上に乗っかるような格好になっていたと思う。人間はサルにしてもシカにしても、奥山に行けば食っていけると思っているが、これは間違い。シカは丹沢の山で、笹を食い尽くしたり、ブナの新芽を食べたりして死んだシカがときどきいる。あんな山奥は、いくらシカでも行きたくない。本来の棲み家は武蔵野台地とか、多摩丘陵とかの里山だった。ところが人間の開発によって、棲み家がなくなってしまって、人間はサルやシカは奥山の動物だ思うようになった。そしてイノシシやクマが里に出てくると奥山に帰れみたいなことを言う。奥多摩町でクマが出てきて困るから、柿を早く採ってしまおうとって、採ってもらう人を募集したら、30人のところに千人ぐらい応募したという。本当はそうでなくて、クマに食わせるための柿などをもっと奥の方に植えてやった方がいいかもしれない。クマにしてみれば食べ物が多いから、里山に出

てきている。離村などで柿をもぐ人がいないなら、クマヤサルに柿ぐらい少し戻してやってもいいと思う。

## 豊かな自然育む雑木林

手入れのいい雑木林。コナラやクヌギ、イヌシデ、エゴノキとかいろいろな木が生えている。さっき言ったのは山というよりも水があるところ。田んぼから水路、湿地だった。今度は山の方をみてる。するといろいろな木が生えていて、これもやはり生物の宝庫になっている。木の穴などは小鳥の棲み家になるし、夏になると樹液が出てきてカブトムシやカナブンとかいろいろな昆虫などが寄ってくる。

タマノカンアオイなども、林の下草にある。雑木林の下草は、意外に豊かだ。雑木林はたいしたものはないと思うけれども、植物の種類を調べるとずいぶんいろんなものがある。タマノカンアオイというのは、元々ギフチョウの食草でマニアにはよく知られている。

ギフチョウは、なぜこんな植物を選んだのか不思議な感じがする。カンアオイなどは、足元に花がつくので、ものすごく分布の拡大が遅い。前川文夫という先生が、それを計算した。このままだと足元に種が落ちて、ほとんど分布の拡大が出来ない。ところがよくしたもので、アリが落ちた種を運ぶという。どれぐらい運ぶかというとなんて1粒。種に脂肪がくっついていて、その脂肪がほしいためにそれを運んでいって巣の中に入れ、脂肪のついた部分をかじり取って、種を捨ててしまう。それで1粒ぐらい移動させる。動かした後そこで発芽するけれど、次の種を着けるのに10年かかる。簡単に言うと1年間に10%しか動けないことになる。1年に10%だと、1万年かかってたったの1㎡。ものすごく分布の拡大が遅い。そのお陰で、カンアオイの仲間は種の分化が非常に大きくて、例えば天城へいけばアマギカンアオイとか、東京

の多摩だとタマノカンアオイ、カントウカンアオイというのもある。地方ごとにいろんな名前のカンアオイがあって、それぞれ種が分かれてしまっている。こんなに分布拡大が遅い上量も多くない。だからギフチョウはこの草をなぜ選んだのか不思議だ。もっとたくさんある草を餌にすれば生活が楽だったはずである。

ギフチョウはきれいなので、人間が捕まえてしまう。ギフチョウが捕まえられていなくなってしまったものだから、カンアオイはあっても食べられることはなくなった。実は、ギフチョウは早春のカタクリが咲く頃に飛び出して、他のチョウに先んじて舞い出す。そのとき産卵して、幼虫の食べる餌が、当然緑でなければ食べられないので、それで常緑のカンアオイを選んだのではないかとされている。カンアオイは冬でも葉が青いので、カンアオイという名前がついている。私たちが調べたところ、実際は結構よく落葉するけれど、一応そんな形でギフチョウはカンアオイを餌にするようになったと理解されたい。

里山にはウバユリという、北の方から伝わってきた植物やチゴユリをはじめ、名前を挙げればきりなくたくさんの植物がある。

## カタクリの魅力

丘陵地には、カタクリがよくある。あるけれど、カタクリを好きな人がたくさん来て、ただ見て写真撮っておしまい。カタクリは、写真撮っておしまいにしたのではもったいない。なぜかというとなんて、本来は雪国の植物だからだ。雪国のカタクリは、一斉に咲くととてもきれいで、カタクリファンでなくても行ってみたいくなるのではないかな。東京のカタクリに比べると色はものすごく鮮やか。東京のカタクリは、何となく色が薄くて元気がない感じがするけれど、雪国のは勢いがよくて、これが本拠地だなという感じがする。



カタクリ

雪国では、カタクリが雑草のように群生している。カタクリファンはたくさんいて、各地のカタクリを見て歩く。4月の初めか3月の末ぐらいに、東京付近でカタクリが咲く。分布地は八王子とか秋川のあたり、あるいは大泉とかポツン、ポツンとある。それが終わると秩父に行く。秩父の終わると栃木県のカタクリを見に行く。日本の旧石器研究の発祥の地である岩宿遺跡の裏山に、とてもきれいなカタクリがあって、そういうのを見に行く。それが終わると新潟へ行ったり、岩手県の沢内村に行ったりする。一番好きな人は病膏育で旭川まで行く。旭川にカタクリの産地があって、わざわざ飛行機に乗って見に行く人もいるそうだ。それぐらいファンがいる。

カタクリは、日本海側の秋田あたりから新潟県ぐらゐに分布の中心がある。日本海側の多雪山地がカタクリの本拠地。このあたりだと、雪が消えた直後に、非常にわーっと繁茂してきれいな花を咲かせる。雪のあるところが本来の棲み家。雪解

けの後に福寿草とかいろいろな植物と一緒に咲く。そういう植物が東京都かいろんなところに点々と出てくる。

## カタクリは氷河時代に南下

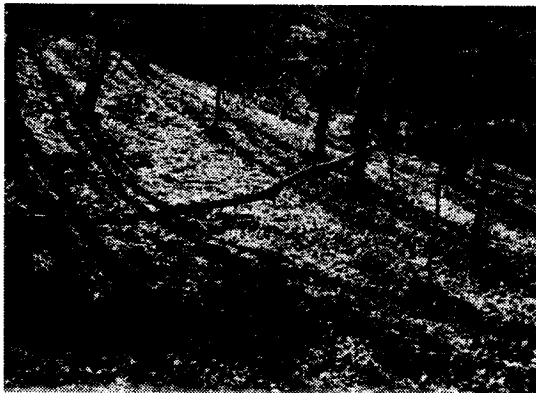
なぜ、本拠地でもないところにあるのだろうか？。簡単に言うと、氷河時代に南下してきたものが生き延びているという格好になる。氷河時代は、そんなに昔のことではない。日本の場合は、皆さんは学校の教科書で氷河時代のことを、たぶん教わっていないと思う。教わっていないから、氷河時代が日本の自然にいかにかかわっているかという話は、あまり聞いたことがないと思う。

実は氷河時代は、ものすごくいろいろな形で、日本の自然の成り立ちにかかわっている。いくつか誤解があるので、ちょっとだけ簡単に触れておきたいと思う。氷河時代の一つの誤解は、地球上全部が氷の下になったということ。それは間違い。カナダとか北欧のノルウェーとかスウェーデンなどは氷の下になったけれども、他の場所ではそんなことはない。日本の場合も槍ヶ岳とか穂高などの山では氷河が発達したが、他の場所は氷河が覆ったわけではない。ごく大雑把に言うと、東京が今の帯広くらいの気候になったのが、日本の氷河時代ということになる。このかなり寒くなった時期に、カタクリとかその他諸々の植物が南下してきた。ツガシワが千葉県などに残っていたりする。これは尾瀬などにある植物が、千葉県とか東京でも石神井公園なんか一時あったりした。しかし、もう野生の状態では絶滅した。そんな形で、いろんなものが南下してきている。

氷河時代は、もう一つの誤解は年代のこと。氷河時代は、ものすごく古いと思っている人が多い。でも最後の氷河時代は1万年前に終わっている。

1万年前はどのくらい前かということ、本にたとえるとわかりやすい。普通の新書版の最初の

ページで地球が誕生したとする。これが46億年前。一番最後のページの一番最後の字のところを現在とすると、氷河時代は何ページぐらい前かということになる。この本は、230ページもないので、わかりやすくするために46億年を230ページで割ることにする。すると1ページの年代が出てくる。1ページが2000万年になる。1ページ2000万年とはどういうことかということ、中に20行とすると、1行100万年になる。1行100万年とすると、1行に35文字入っているから、1文字が3万年になる。要するに、地球の歴史はそれぐらい長い。氷河時代が終わったのは1万年前だから、最後の字の中に入ってしまう。だからいろんな形で、影響が残っていないわけがないということになる。実際、いたる所に残っている。



カタクリの生えている沖積錐の地形・あきる野市切欠

## カタクリが生きる条件

氷河時代に南下してきたカタクリは、氷河時代が終わるとどうなるか。気候が暖かくなっていく。カタクリは種でも増えるけれど、球根で夏を越す。開花の後には冬の冬眠でなく夏の眠り「夏眠」に入る。夏は地面の中で、球根の形で過ごす。このときに温度が高すぎると、台所のニンクと同じで、消耗して行って、だんだん小さくなってしまふ。実はカタクリが生き延びるためにはいくつかの条件が要る。

カタクリが生き延びるための条件の一つは雑木

林。冬は雑木林の下で、陽がよく当たるというのが一つの条件。もう一つの条件は北斜面ということ。

氷河時代が終わった後、カタクリはどのように反応するかを考えてみる。一つは、南へきたものが再び北に戻る。東京のカタクリは栃木県とか福島県などに戻っていく。犬や猫じゃないけれど、種を落としては順次動いていく。

二つ目は、高いところに昇る。東京の御前山は小河内ダムの南にある1300㍎ぐらいの山。近年、ここはカタクリの名所になってしまい、人が行き過ぎて困っている。みんなで踏みつけるので、カタクリは非常に迷惑している。この程度の高さの山がカタクリの本来の棲み家になる。

東京の秋川の丘陵地にもカタクリがある。カタクリがある場所は、丘陵が集中豪雨で崩れて、沢沿いに小さな扇状地を作ったところ。崩れてきた土砂が貯まった場所に生えている。これはどういうところかということ、水気が多いところ。水気が多いということは、夏になって気温が上がると、水分が蒸発して気化熱を奪うので涼しい。低地では例外的に非常に涼しい場所になる。外気温が上がってもここは上がらない。鈴木由告先生が実際に観測して、夏でも22℃以上にならないことを確かめた。私も観測して、同じ結果を得た。22℃が一つの基準になっていて、それ以上にならない場所ということが重要。

秩父のカタクリの産地は、地すべり地で、やはり非常に水っぽく涼しい。カタクリは北斜面で、かつ水気が多くてとても涼しい場所で生き延びてきた。東京や秩父のカタクリは、氷河時代の生きた化石であって、それがかろうじて、涼しい場所を選んでポツン、ポツンと生き延びてきた。

カタクリの話をしているが、他の植物も同じで、イチリンウとかキクザキイチゲ、アズマイチゲといった類のものは、春植物といっているけれども、基本的には北方系の北から来た植物であって、それが特別涼しい北斜面の水気の多いところ

で生き延びてきた。

雑木林で葉を落とすので、春先は北斜面も陽がよく当たる。そういう条件があって、いろんな植物が生き延びてきた。最初に、日本の在来種の植物や昆虫がここにはとても多いと言ったが、氷河時代の生きた化石のような形で、生き延びてきているものがたくさんある。

武蔵野台地の新座に、みごとな湧き水がある。上が武蔵野礫層で下から湧き水がある場所で、カタクリが一杯生えている。

蛇足になるが、カタクリの発芽1年目は、松の葉を挿したようにひょろひょろとして細くて、なかなか大きくなる。春先に少し陽に当たって、球根をつかってあとずっと寝ていて、次の年にまた光を浴びて少しだけ大きくなるという具合だから、親になって花を着けるまでに7~8年かかる。

## 里山は貴重な生物の棲み家

里山には、中国の草原要素の植物群がたくさんある。これもすごく大事なことだ。キキョウ、ワレモコウ、リンドウ、シオン、オキナグサ、ホタルブクロ、カワラマツバ、イカリソウ、ゲンノショウコなど、多少月並みなものもあるけれど、あれと思うようなものが多いと思う。これは中国の東北地方（旧満州）から伝わってきたものらしい。氷河時代になると、海面が低下して日本列島が乾燥する。この時期に伝播してきたらしい。氷河時代に来たものが、縄文時代になると人が火入れをする。武蔵野台地などもそうだが、林を燃やすとその跡にススキなどの草原が出来る。そのようなところでかろうじて存続してきたらしい。細々と生きてきたはずだが、弥生時代になると里山に人が住むようになってくる。そうして田んぼや畑を耕作するようになる。田んぼや畑の畦や土手で、中国の草原要素の植物群が生き延びてきたらしい。

田んぼや畑の畦では、しょっちゅう草を刈る。草を刈るということは、草原にいたときにいろんな動物が植物を食べてしまうことと同じ。刈られることによって、逆に存続するという形で生き延びてきたようだ。京都大学におられた田畑先生が発見された。中国の東北地方の草原を調べたら、そこへ行くと日本にある植物がいっぱいあって驚いた。それから日本へはここから来たんだろうと推定した。

1万年前に氷河時代は終わるが、氷河時代のピークは2万年前。日本アルプスや日高山脈などに氷河がかかった。当時は、カナダなどに大陸氷河が出来て、その分海面が低下する。だいたい130センチぐらい下がった。そうすると、この図では日本列島は朝鮮半島に付いていないけれど、付けてしまう人もいる。そのぐらい微妙なところで、実際は付いていたか付いていなかったか正直言ってわからない。わからないけれど、動物や植物が伝わってきている。人間も来ている。その時期の日本列島の状況は、北海道の北半分ぐらいは今の北極圏のようにツンドラの状況になっていた。東北地方から中部地方まではエゾマツ、トドマツみたいな針葉樹の林になっていた。

今、照葉樹林がある地域にブナなどの落葉広葉樹林があって、照葉樹林は屋久島、種子島といくつかの半島の先端に押し込められるまでに衰退してしまっただけだ。

瀬戸内海は草原になっていた。雑木林と草原が広がるような感じになっていた。

現在の植生帯と比べると、一個ずつ南にずれている。現在東北のブナ林があるようなところに、針葉樹が下がってきている。照葉樹があるところに、ブナなんか下がっていた。照葉樹林は、ほとんどなくなりかけていた。この時期に、大陸から、日本列島にいろんな動植物が渡って来た。八ヶ岳の山麓には、中国の草原系の昆虫がかなり見つかっている。野辺山みたいな火山性の高原に、



いろいろなものが生き延びてきた。

弥生時代に、人が里山に手を加えるようになった。そのお陰で、中国から来た植物や昆虫が、ほとんど日本の在来種みたいになって生き延びてきた。植物は刈られることによって、分布を拡大できたし維持することもできた。植物は草をときどき刈ることに對してはかなり強いが、除草剤をかけられると家畜が食べるのとは違って枯れてしまう。今は、除草剤の影響で、在来種が次々になくなって、昔の里山にあった植物は昆虫とともに絶滅危惧種になってしまった。

日本には240種ぐらいいるチョウの7割ぐらいが里山を棲み家している。いろいろな草が生えていて、それを食べていろいろな昆虫が生息してきた。年々里山はだんだん荒れてきた。例えばアズマネズサという笹の仲間が繁って、中が藪のようになってくるとカタクリをはじめ下草はだめになる。

日本の生物の多様性は、里山がだめになって危機的な状況になっている。生物の多様性を維持するには、人が里山に手を入れ、適切な管理をすることが必要である。 (文責・事務局)

## 第26回定期総会報告

第26回定期総会を2月19日、東京・霞ヶ関の法曹会館で開催した。各議案を原案通り承認。総会后、小泉武栄東京教育大学教授から「里山の保全はなぜ必要か」と題する記念講演を行った。また、懇親会を行い和やかに歓談した。

総会では、前年度から継続審議になっていた名称の変更について諮ったが結論が出るに至らず、更に継続審議することになった。

総会で承認された議案の概要は以下の通り。

### ◎活動報告

#### 1. 研究会

- 4月25日 ドイツ、バーデン・ヴィルテンベルク州の林業条件不利地域対策 (堀 靖人氏)
- 6月13日 熱帯林再生の試み (野澤 眞次氏)
- 7月27日 森林と消費者の距離を考えるーウッドマイルズ研究会の目指すものー (藤原 敬氏)
- 9月17日 国有林野事業の改革 (辻 健治氏)
- 10月29日 千葉県における里山整備作戦 (大槻幸一郎氏)
- 12月17日 武蔵野平地林の保全をめぐって (中西

博之氏)

#### 2. 行政課題研究会

- 5月14日 緑の雇用と森林組合のあり方 (岡田憲和経営課長)
- 6月11日 世界自然遺産候補地の検討 (飯田道夫森林保全課長)
- 7月9日 人工林の間伐をめぐる諸問題 (沼田正俊森林整備課長)
- 10月8日 森林税制をめぐる動き (新木雅之企画課長)
- 11月12日 WTO交渉について (大杉武博木材貿易対策室長)

#### 3. 協同取材

- 6月22~23日 アファンの森、サンデンフォレスト
- 11月19~20日 足尾銅山の荒廃地における森林再生事業と日光男体山の森林保全 (治山) 事業

4. 幹事会 7回開催し当面の活動方針・研究会のテーマと講師等を協議。

#### 5. 会報の発行

34~37号まで4回発行し、研究会の講演内容行政課題研究会報告等をまとめ会員に配布した。

## ◎ 2004年度活動計画

会の活性化を図るとともに、会員の情報収集および取材活動に役立つよう研究会、行政課題研究会を随時開催する。研究会は年間テーマ「国産材の活用と森林・林業」とし、森林・林業が直面している諸問題、今後のあり方、展望をさぐる。特に、これからの林業は多様な機能を発揮する施業が求められており、森林の有する諸機能を高め森林・林業の活性化に向けた研究が重要な課題となっている。

また、会員相互の連絡を密にするとともに、会の活動状況を報告するため会報「林政ジャーナル」を年4回発行する。

友好組織である農政ジャーナリストの会及び林業広報連絡会と共通テーマがあれば協同で研究会を開催する。

## 1. 研究会

年間テーマに基づいて随時開催する

## 2. 行政課題研究会

主要な行政課題について林野庁幹部と懇談する

## 3. 協同取材

（助森とむらの会との共催で春と秋の2回開催する

## 4. 幹事会 会の運営等について協議するため随時開催する

## 5. 組織の拡大強化

会員の加入促進、会員相互の連絡を緊密化・円滑化に努める

## 6. 責任体制の明確化

会運営の円滑化とともに活動の活性化を図るため、感じの役割分担を決めてそれぞれ責任を持って活動する

## 2004年度収支予算

### 収入の部

項目	前年度決算額	予算額	増▽減	備考
会費	971,000	1,054,000	83,000	
個人会費	441,000	504,000	70,000	72人×7,000
団体会費	530,000	550,000	20,000	27×20,000+10,000
雑収入	128,408	120,000	▽8,408	
小計	1,099,408	1,174,000	74,592	
前期繰越金	1,166,780	1,240,485	73,705	
合計	2,266,188	2,414,485	148,297	

### 支出の部

項目	前年度決算額	予算額	増▽減	備考
研究会費	164,500	310,000	145,500	
講師謝礼	164,500	300,000	135,500	
会場費	0	10,000	10,000	
行政課題研究会費	0	10,000	10,000	
3木会費	0	0	0	
会議費	242,642	260,000	17,358	
総会費	242,642	250,000	7,358	
幹事会費	0	10,000	10,000	
事務局費	270,096	244,000	▽26,096	
事務運営費	0	0	0	
通信費	171,845	180,000	8,155	
印刷費	88,400	54,000	▽34,400	
事務用品費	9,851	10,000	▽149	
会報発行費	338,045	340,000	1,955	
雑費	10,420	10,000	420	
予備費	0	10,000	10,000	
小計	1,025,703	1,174,000	148,297	
前期繰越金	1,240,485	1,240,485	0	
合計	2,216,188	2,414,485	198,297	